

中国北京市における幼児肥満頻度と生活習慣の変遷に関する研究 (I)  
(効果的な運動および体力向上の方策に関する研究)

岡田知雄

日本大学医学部小児科

(はじめに) 生活習慣が幼児の健康に及ぼす影響のうちでもとりわけ幼児肥満は、近代産業の発達した諸外国における小児期からの総合的な健康づくりの標的になってきている。学童期の肥満は高率に成人の肥満へと移行するとされ、幼児期からの肥満予防は世の東西を問わず重要な問題である。近代化都市化の歴史の浅い中国北京市において生活習慣の変化がどのようにして幼児肥満を形成するかを検討した。

(対象と方法) 北京市西城区の二つの幼稚園児合計 338 人を対象とした。幼稚園の一つは完全寄宿制 172 人、もう一つは通園制 166 人である。年齢は共に 3・5 歳 (平均  $4.1 \pm 0.8$  歳) で差はない。身体計測は 1997 年 6 月に同一方法で行った。身長、体重、肥満度%等を測定算出した。尚、標準体重は 1985 年中国の主要都市にて行われた幼児の身長別性別の標準体重を用い、肥満度は実測体重 $\div$ 標準体重 $\times 100$  により求めた。20%以上を肥満と判定した。

(結果) 1. 肥満児の出現率は、1986 年の北京市の報告では 2.3%と比べて今回 5.3%と、カイ自乗検定で有意差  $p < 0.01$  を示した。通園制と寄宿制とで比較すると前者 8.6%、後者 2.6%と

前者が有意に高率であった ( $p < 0.05$ )。2. 食習慣と肥満との関係について、通園制の幼児においては、寄宿制の幼児よりも清涼飲料水を毎日飲む頻度が高く ( $p < 0.05$ )、また、通園制では清涼飲料水を毎日飲む群は飲まない群と比べ肥満度%は有意 ( $p < 0.05$ ) に高かった。

3. 1 日の生活時間の比較について、特に通園制の幼児については就眠時刻が遅い傾向が見られた。4. 室内、室外の遊び時間と TV・ビデオ視聴時間との比較、両園ともに休日の室内・室外の遊び時間に相違は無かったが、TV・ビデオ視聴時間では平均差 55 分と通園制の幼児の方が有意に長かった ( $p < 0.01$ )。5. 好きな食物比較においても、通園制ではフライドチキン、ハンバーガー、への嗜好が、また、寄宿制では夜食は皆無であったが、通園制ではミルク、菓子類をはじめ多彩な食べ物をとっていた。

(考察) 都市化の浅い北京市における幼児肥満と生活習慣の関係を検討した。その結果、従来からの生活習慣が比較的良く守られていた寄宿制の幼児では、肥満の頻度も 10 年前と変わり無かった。これに対して通園制の幼児では、わが国や欧米社会と共通する食と身体活動についての肥満形成因子の関与が示唆された。

(結論) 現代の都市化社会における幼児肥満の予防対策を十分に押し進めることが必要である。

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

(はじめに)生活習慣が幼児の健康に及ぼす影響のうちでもとりわけ幼児肥満は、近代産業の発達した諸外国における小児期からの総合的な健康づくりの標的になってきている。学童期の肥満は高率に成人の肥満へと移行するとされ、幼児期からの肥満予防は世の東西を問わず重要な問題である。近代化都市化の歴史の浅い中国北京市において生活習慣の変化がどのようにして幼児肥満を形成するかを検討した。